

研究課題：自立高齢者の口腔の健康と WHO/QOL の関係および口腔機能向上支援による QOL への貢献
 研究者名：武井典子¹⁾、藤本篤士²⁾、大橋一友³⁾、岩久正明⁴⁾
 所 属：¹⁾財)ライオン歯科衛生研究所、²⁾医療法人溪仁会西田山病院歯科診療部、
³⁾大阪大学大学院医学系研究科、⁴⁾日本歯科大学

【目的】

近年、歯の欠損や歯周病による症状は慢性的に継続・進行し、それにより、もたらされる障害は食事の楽しみ・会話や表出の豊かさなどの QOL に深くかかわっていると考えられている。また、健康教育の最終目標に QOL 向上が位置づけられているが、的確に定義することの困難な概念であるため、曖昧に表現されているのが現状である。さらに、口腔ケアは、高齢者の QOL を向上すると言われているが、包括的な QOL 評価スケールを活用して確かめられていない。

そこで昨年は、QOL を包括的に評価できる「WHO/QOL」調査票および我々が試作した「口腔の健康度」に関する調査票を活用して自立高齢者の口腔の健康と QOL の関係および口腔ケア(治療と清掃中心)の介入による貢献度を検討した。

一方、昨年の 4 月、介護保険の新施策として健康高齢者を対象とした「地域支援事業」と軽度要介護者を対象とした「新予防給付」が打ち出され、歯科医療従事者にも「口腔機能向上」を支援する役割が求められるようになってきた。

そこで今回は、引き続き WHO/QOL 調査票を活用して自立高齢者の口腔の健康と WHO/QOL の関係および口腔機能向上支援による QOL への貢献度を明らかにすることを目的に、以下のポイントを追加して検討した。1) 昨年の口腔清掃と治療に加えて、口腔機能向上訓練を追加した。2) 口腔の健康と WHO/QOL の関連性を明らかにする方法論を検討するために、今回は、施設スタッフを対象とした入所者の日常生活についての質問紙調査を追加した。

【対象および方法】

対象者は、札幌市のケアハウス入所者 59 名(初回)および 47 名(3 ヶ月後)である。最初に、WHO/QOL26 (N0. 860) 調査および演者らの試作した「口腔の健康度」の質問紙調査(40 問)を行った。さらに、施設スタッフにも入所者の日常生活についての質問紙調査(21 問)を行った。その後、歯科健診、カンジダ・唾液湿潤度検査、口腔機能評価(反復唾液嚥下テスト、オーラルディアドコキネシス、咀嚼力判定ガム)を行ない、その結果に基づき、個々人に対応したオーダーメイドの口腔機能向上訓練を提案した。3 ヶ月後に同様の質問紙調査、健診、検査を行った。

【結果および考察】

- 1) 入所者を対象とした調査において、口腔の健康度と WHO/QOL 平均値との関連性が認められた。また、質問紙調査の項目別では、『口腔を通した食事への影響』および『口腔が原因による日常生活への影響』が WHO/QOL 平均値と関連性が認められた。さらに、介護スタッフによる入所者の日常生活に関する調査項目においては、WHO/QOL 平均値と多数の項目において関連性が認められたことから、今後、施設においては、入所者本人の主観的な調査に加え、施設スタッフを対象とした調査の有効性が示唆された。
- 2) 口腔機能訓練が必要であった自立高齢者は 93.8%であったが、訓練を毎日実行した高齢者は 21%であり、自立高齢者を対象とした 3 ヶ月間の口腔機能訓練において口腔機能の評価項目に変化が認められなかった。また、口腔ケア前後で WHO/QOL 平均値、口腔の健康度の変化も認められなかった。今後、自立高齢者に対して積極的に口腔機能訓練ができる楽しいプログラムの開発が課題である。
- 3) 2 年間にわたり、包括的な QOL 指標を活用して、ケアハウス入所者を対象とした調査を行った結果、口腔ケアの介入では WHO/QOL 平均値は向上しなかった。今後さらに、継続的長期的な観察が必要であり、QOL を低下させないことについても目標の一つとする必要性が示唆された。